

★米軍事介入の承認を排除せず＝グアイド国会議長

A F P通信は2月9日、暫定大統領を宣言したグアイド国会議長のインタビューを報道、同議長がマドゥーロ政権を排除し人道危機をやわらげるためには、米国の介入を承認する可能性を排除しないと語ったと報じた。

議長はA F Pにたいし「米国の介入は論議を呼ぶ問題」としながらも「人命を救うため必要なあらゆることをする」と語った。また「より低い社会的な犠牲で、統治と安定をつくりだして緊急事態に対処するあらゆることをやるつもりだ」と述べた。

★ベネズエラの野党はなぜ米国の軍事介入反対をいわないのか＝米専門家

ベネズエラ出身のミゲル・ティンカー・サラス（ポモナ大教授）は米独立系メディア「デモクラシー・ナウ」のインタビューで次のように批判している（2月5日）

質問 中南米政策で人権侵害に加担したと批判されているエリオット・エイブラム氏がトランプ政権で対ベネズエラ政策を統括することになりました。そのことについてベネズエラではどういわれているのですか。

サラス教授 野党のなかでは明確にいわれていませんね。彼らはエイブラムスと会ったのですよ。彼と結び付いています。指名を非難していません。ボルトン補佐官についても同じです。なぜ彼らは米大統領に「軍事オプションは望まない」といわないのか。外国の侵攻は望まない。海兵隊もきてほしくないといわないのか。ボルトンが米石油企業にベネズエラの石油の利益をやるといったことに、そんなことは望まないといわないのか。マルコ・ルビオ上院議員にベネズエラの問題に介入しないでほしいといわないのか。ボルトンが専制のトロイカとってベネズエラを世界戦略の一部につかって、中南米に冷戦を復活させるようなことは望んでいない。人々はエイブラムスが血塗られた手でベネズエラ政策を担当することを望んでいません。それなのに野党からは、こうした声は聞こえないのです。（以上）